



# 学校だより 青い鳥

平成30年度2月号  
さいたま市立上落合小学校  
平成31年2月1日作成

さいたま市中央区上落合4-14-24 TEL 852-5381  
http://kamiochiai-e.saitama-city.ed.jp/ E-mail:kamiochiai-e@saitama-city.ed.jp

本にはワクワクがいっぱい

教頭 久保田 悌二

「本の福袋」、1か月ほど前に新聞を読んでいて、とても興味深い文言が私の視界に飛び込んできました。「初売りの書店に並んでいる福袋のことだろうか。書店でも福袋を置くのだろうか。どのような人が買うのだろうか。どんな本が入っているのだろうか。・・・」もやもやとした思いで読み進めていくと、これは図書館での取り組みだと分かりました。では、どんな福袋なのでしょう。調べてみました。

正月商戦の福袋をヒントに、兵庫県宝塚市立西図書館で始めたこの企画は、今年で10年目になります。「司書が選んだ福袋」と呼ばれているようです。袋の中には、司書が選んだ「子どもたちに読んでもらいたい児童書」が1～5冊入っていて、表には、中身を想像させる「謎の言葉」と冊数、対象年齢が記載されています。図書館を訪れた利用者は、これらの内容を基に、この後展開される自分だけの読書の世界に思いを馳せながら、気になる福袋を選び、借りていくこととなります。残りわずかとなった冬休みの時間を有意義に使う、読書の世界への冒険の船出となるのでしょうか。

さて、場面を本校の図書室に移してみましょう。20分休みや昼休み、国語の授業などで、子どもたちは図書室を利用しています。私がタイミングよく、その時間帯に図書室を訪問することがあります。子どもたちが本の世界にどっぷりと浸かり、本の世界を楽しんでいる至福の時間を邪魔しないよう、そうと子どもたちのそばを通り過ぎようとする、私の視線を感じた子が私に話しかけます。「〇〇っていう本を読んでもらいたいのよ。このシリーズはねえ・・・。教頭先生は読んだことあるの?」「このシリーズの最初の頃は読んだことあるけど、最近のは読んでないなあ。」「もうすぐ読み終わるから、次に教頭先生が借りるといいよ。」会話の最中のその子の目からは、私に何としても伝えたいことがあるという想いの強さが伝わってきます。自分が読み進める中で味わった感動を私と分かち合いたい、そんな熱い想いなのでしょう。

私も子どもの頃、読書は嫌いではなかったと記憶しています。ジャンルは問わず、物語や伝記、図鑑など、様々なものを読んでいました。もちろん漫画も。本は、様々な世界に私をいざなってくれました。偉人の生き様に触れ子どもながらに自分の生き方について考えたこと、物語の主人公になり空想の世界を冒険したこと、作者ごとの表現方法の特徴に気付き自分の語彙を増やし表現を豊かにしたこと。本校の子どもたちにも、ぜひたくさん本に触れ、その世界にどっぷりと浸かり、言葉のシャワーを浴び、結論が出なくてもいいので様々なことを感じ、考えてほしいと思います。自分で本を探し、自分で読み進め、自分で考えて自分の中に何らかの答えを残していく。子どもたちを取り巻く情報過多の今の状況だからこそ、この体験が重要になってくると思っています。

蛇足になりますが、私は最近、漫画を手にとることが多いです。「ドラッカーのマネジメント」や「孫子の兵法」など、文字だけの本では、私にはちょっと理解が…と弱音を吐いた感じです。そのような中で興味深かったのが、「漫画でわかる 梶田隆章先生とニュートリノ」(東松山市教育委員会)です。ノーベル物理学賞(2015年)を受賞された埼玉県出身の梶田先生と直接やり取りをする機会があり、会話をするための予備知識を得ようと入手した本でした。残念ながら、ニュートリノについては少し分かった気になったようなレベルですが、幼少期からの梶田先生の人生に触れると、ノーベル賞を受賞する方も、決して机に向かっているだけの学びを続けていたのではないことが分かりました。様々な分野、様々なことに興味関心をもち、自ら考え、自ら行動し、生きた学びを積み重ねることがいつの時代でも、誰にとっても大事ななのでしょう。

もう一つ蛇足です。「本の福袋」について調べていく中で分かったのですが、全国の多くの図書館で似たような取り組みが展開されてきているようです。

## 学校教育目標

あかるく

なかよく

たくましく